

【論文】

敬語の使用状況を記述的に理解する実践

ビジネス場面のコミュニケーション学習における
企業ドラマの発話分析

芝原里佳*

概要

文化や言語の規範的理解が孕む本質主義への批判から、言語の実態を記述的に理解する試みとして、学習者らがテレビドラマの敬語使用を分析する実践を行った。本稿では、学習者による分析結果や実践後のアンケート結果をもとに、この実践の有効性を議論する。学習者は自身で分析することにより敬語の使用状況が教科書に書かれている規範より複雑であることを発見できたが、その結果一層明確で使用可能な規範を求めるようになることがわかった。この問題への対応として今後どのようにプロジェクトを展開すべきかを議論する。

キーワード

批判的アプローチ, 記述的理解, 敬語, 発話分析, 企業ドラマ

1. はじめに

日本語教育の現場では、日本語の持つ規範や日本の文化的特徴、及び社会事情を教えることが重要視されることがある。しかし言語を規範的に学習し、文化的特徴の一般論を知識として取り入れることは、実際に使用される言語の多様性を見落とし、文化を「我々の文化」と「彼らの文化」のように単純な二項対立で捉えることにつながる危険性があると指摘されている(久保田, 2008)。熊谷(2008a, 2008b)は、教科書における言語形式の規範や文化に関する記述は、むしろ特定のステレオタイプやイデオロギーを伝達する装置として働き、教師はそれらを固定的で「正しい」ものとして、学習者に内面化することを求める傾向にあるとしている。

ビジネス場面の日本語によるコミュニケーションの教育を例にとると、日本の企業のビジネス哲

学や慣行、敬語を主とする言語形式の習得が強調されることがあるが、企業によって哲学や慣行が異なるのは想像に難くないし、どのような敬語表現が用いられるのか、あるいは用いられないのかは個別の相手や状況によって異なり、一概には言えない。にもかかわらず、特定のビジネス哲学や慣行をわきまえ、敬語を正しく使って会話ができなければ、一人前の教養ある社会人とは見なされないといった言説が、日本語学習者を取り巻いている。山下(2001)は、実態の検証がないまま敬語の有用性を強調する言説は、これからビジネス場面のコミュニケーションに参加しようとする学習者の心理を抑圧するとし、その言説の政治性を指摘している。

言語の規範と固定的な文化概念の内面化を重視する結果、本質主義に陥りやすい従来の言語教育を批判し、久保田(2008)は文化を教えるための批判的アプローチを提唱している。そのアプローチでは4つの視点が紹介されているが、その中の一つ「文化を記述的に理解する」という視点は、言語使用の実態を検証することによって、それが

* マレーシア科学大学言語リテラシー翻訳学部
(shiba@usm.my)

決して規範どおりではない複雑なものであることを理解することを目的としている。その実践として、熊谷（2007）はクリティカル・リテラシーの立場から、カタカナの使用実態を学習者が分析する「カタカナプロジェクト」を行っている。本稿はビジネス場面の敬語使用を分析する実践について報告するが、このような実践から生じる問題についても考察し、新しい提案を試みるものである。まず始めに、実践の背景理論である、久保田（2008）の文化を教えるための批判的アプローチの4つの視点を紹介する。そして「敬語プロジェクト」の内容について報告し、この実践が学習者の敬語観やビジネス場面でのコミュニケーションに対する認識にどのような影響を与えたかを、実践からのデータを基に考察する。そして、この実践から生じた問題点についても考察し、今後このような実践と絡めてどのような教育活動がなされるべきかを提案する。

2. 実践の理論的背景

2. 1. 文化を教えるための批判的アプローチ

久保田（2008）は、ある特定の文化の構成員が、その思考、習慣、言語などにおいて同質で独特なものであるとする本質主義の問題は次のようなものであるとする。まず、その文化の構成員の多様性、流動性が見過ごされているため、固定した「正しい」文化的情報が存在すると考えられてしまうことである。その結果、文化や言語に関する学習や指導を規範的なアプローチへと導いてしまうことである。敬語に関して言えば、日本の会社では若輩者が年配者に敬語を使うのが常識であると日本語教室で教えられることがある。しかし、年功序列が崩れ、若い世代による起業、労働力のグローバル化が目覚ましい現代、それが社会の言語使用の実態を本当に反映しているかは疑わしい。むしろこのような本質主義に基づく規範は、社会的・文化的・政治的に様々な動機付けによって構築され利用されてきたものだと考えられる。そこで久保田は、文化を教えるための批判的アプローチとして、以下4つの視点（4D）を提唱している。

①文化を規範的ではなく記述的（descriptive）に理解する。②文化内の多様性（diversity）に注目し、ディアスポラや雑種性などの概念を取り入れる。③流動的（dynamic）な文化の性質を捉えることに

よって、文化的慣習、産物、思考を歴史的な文脈において解釈する。④文化は言説的（discursive）に構築されていることを認識する。①の「文化を記述的に理解する」ことを言語学習の文脈にあてはめると、実際に社会の中でどのような言語形態が使われているかを検証することである。それは、目標言語の中にある多様性を実証することにつながる。実証された言語に関する知識は、しかし、普遍的で一般化が可能なものとして捉えられてしまう可能性もあると久保田は指摘する。そのため、たとえ実証された知識であっても、それがあつた時点での多様な言語使用の側面を実証したものであり（②の視点 diversity）、かつ歴史の流れの中で変容する可能性があるもの（③の視点 dynamic）として捉えられる必要がある。その結果、必然的にその言語の知識を普遍的な真実として見なすことはできず、その言語に関する一つの言説として相対化されることになる（④の視点 discursive）。今回の実践ではビジネス場面の敬語使用の実態を理解すること（①の記述的理解）を目指したが、その発見をどう捉えるべきかを学習者と共に考える段階で、②③④の視点は大変重要なものである。

2. 2. テレビドラマというメディアを分析対象とすること

海外の日本語学習者にとって日本のテレビドラマは日本社会における言語使用の実際を知るための貴重なリソースである。しかしその半面、メディアの発信する情報が現実の単なる反映ではなく構成されたものであり、常に特定のメッセージや価値システムを内包していることを忘れてはならないだろう（カナダ・オンタリオ州教育省、1989/1992）。具体的に言うと、登場人物の話すことばやその内容は、ドラマの製作者によって意図的に操作されるか、あるいは製作者が内面化している価値観やイデオロギーが、そこに無意識に反映されるのである。しかし構成された情報とはいえ、テレビドラマは社会の中で繰り返されるコミュニケーションの実態について教科書以上に多くの情報を提供するのも事実である。学習者は映像、音声、音響からより具体的なコミュニケーションの状況を知ることができ、言語使用の多様性を個々の状況と結びつけて理解することができる。日本語によるビジネス場面へアクセスを持たない学習者にとって、テレビドラマはそれらの

情報を提供してくれる身近なリソースだと言える。学習者がドラマを意図的に構成されたものと理解していれば、発話とその発話を持つ効果について感受性を磨くことも期待できるだろう。以上のような点を踏まえ、現実の敬語の使用状況を知るための参考にするという目的で、テレビドラマの発話を分析対象とした。

3. 『敬語プロジェクト』

3. 1. 実践の背景

実践はマレーシアの大学の選択コース「ビジネス日本語」で、教室活動の一環として行われた。このコースは4レベルある日本語副専攻プログラム(合計336時間)を履修した者のみが履修可能である。敬語は、その副専攻プログラムの最終レベルであるレベル4(2年目後期)のシラバスに含まれ、初級日本語教科書『げんきII』(坂野, 大野, 坂根, 品川, 渡嘉敷, 1999)を用いて学習済みであった。本プロジェクトを行った「ビジネス日本語」コースでは、場面シラバス構成のビジネス日本語関連の教科書数種類から抜粋したものを、教材として用いていた。

このコースでは教室活動としてビジネス場面のロールプレイをすることがあったのだが、その際学習者から実際の場面で敬語を正しく使う自信がない、正しく使えないせいで失礼な人だと誤解されるのが怖いといった不安の声が聞かれるようになった。それに対して教師である筆者は、教科書の全ての敬語表現を完全に使えるようになる必要はないだろうし、丁寧さや敬意を伝える手段は敬語を使用する以外にもあるのではないかと話した。そのような経緯から、筆者はビジネス場面のコミュニケーションの実態を自分たちで調べてみ

ようと提案し、学習者は企業を舞台にしたテレビドラマ『ハケンの品格』の登場人物の発話を、敬語に焦点を当てて分析することになった。

3. 2. ドラマ『ハケンの品格』のあらすじと使用理由

2007年に放送されたドラマ『ハケンの品格』のあらすじを簡単に紹介する。主人公・大前春子(篠原涼子)は大手企業にリストラされた苦い経験を持ち、それ以来会社に頼らずに個人の資格と技術を武器に生きることを信念とし、派遣社員として会社を渡り歩いてきた。食品会社の営業事業部マーケティング課に雇われた春子は、その有能ぶりで周囲を驚かすが、業務内容以外の仕事や人間関係を一切拒絶する態度から、正社員らに反感を持たれる。しかし同課の主任・里中(小泉孝太郎)や新米派遣社員・森(加藤あい)らは徐々に彼女を尊敬し頼るようになる。このドラマを選んだ理由は、ストーリーが社内の業務や人間模様を主軸に展開していることに加え、現実に会社で交わされることばを比較的よく反映していると思われたからだ。さらに正社員と派遣社員が共存して働く現代の会社事情がこのドラマの重要な背景となっており、ビジネス日本語の教科書の記述によくある「ウチ・ソト」の概念が、単純にはあてはまらない現実を知るのに貴重なリソースだと思われた。

3. 3. 実践の目的と手順

学習者にはプロジェクトの目的を、教科書にある敬語の規範と比べ、敬語使用の実態はどうかを検証・分析することだと説明した。具体的には、①登場人物の属性や性格はどうか、②登場人物がどのくらい頻繁に敬語表現を使用しているか、

表1 「敬語プロジェクト」実施コースと学習者の概要

コース名	ビジネス日本語(選択科目)					
期間	2010年7月12日～10月29日(2010・2011年度前期)					
授業時間	毎回2時間, 週3回(合計84時間)					
	名前(仮名)	学年	専攻	民族的背景	日本留学の有無	
学習者	6名	ジョン	3	経営	中華系マレーシア人	1年
		ビビアン	3	産業技術	同上	1年
		シェリー	3	翻訳	同上	1年
		ワン	3	翻訳	同上	なし
		デイン	3	翻訳	同上	なし
		ヨーク	3	翻訳	同上	なし

③どの尊敬語・謙讓語が頻繁に使われているか、
④登場人物の敬語使用・不使用がどのような状況で起こるかを調べ、わかったことを活動最終日にクラスで報告するように伝えた。

6人の学習者を3組のペアに分け、各ペアが3人の登場人物（春子、里中、森）のいずれかを担当した。活動はコンピューターラボで行い、随時ドラマを視聴できるように筆者私有のVCD（全話収録で合計6枚）を各ペアに貸し出した。VCDが1セットしかなかったため、各ペアはそれぞれ異なる回を見て担当の登場人物の発話分析を行った。活動は表2の手順で行い、最後の報告会で見せるパワーポイントの資料を同時進行で作成していった。

4. データ

本研究で収集し分析したデータは、以下の通りである。

- ① 筆者が学習者とのやりとりを通して気付いたことなどを授業後に記録したティーチャング・ログ
- ② 学習者が見たドラマ『ハケンの品格』
- ③ 学習者が発話分析のために作成したエクセルファイル
- ④ 学習者が報告会での発表のために作成したパワーポイントファイル

⑤ 実践終了後に行った学習者へのアンケート結果

5. データ分析

5.1で尊敬語・謙讓語・丁寧語の使用頻度調査結果（表3）と、尊敬語・謙讓語の上位ランキングの結果（表4）、5.2で敬語使用状況の分析結果を提示し、それぞれの調査・分析結果が、敬語やビジネス場面のコミュニケーションに対する学習者の認識に、どのような影響があったかを考察する。そして5.3でアンケート結果を分析し、学習者がこの活動にどのような意義を見出し、どのような問題・葛藤を経験したかを考察する。

5.1. 尊敬語・謙讓語・丁寧語の使用頻度と、尊敬語・謙讓語の上位ランキング

マーケティング課の主任・里中の発話を調べた結果、尊敬語も謙讓語も全く使われていないことがわかった。担当したジョンとビビアンは、里中が課の主任なので、同じ課の部下に話すときは尊敬語も謙讓語も使う必要がなかったのだろうと分析した。しかし彼らが扱った第2話と第3話には、里中が上司と話す場面もあり、そこでさえ尊敬語も謙讓語も使わなかったことをビビアンは指摘した。シェリーとワンのペアは、新米派遣社員・森の発話文を全話を通して125も書き出したが、その中で森は2つの尊敬語と5つの謙讓語しか使っ

表2 「敬語プロジェクト」の進行スケジュール

教室活動	報告用資料作成
1日目 ドラマの第1話を全員で鑑賞する。その後ペアに分かれて担当する登場人物の年齢、性別、経歴、社内での職種・地位、性格について表に書き込む。	①登場人物の属性や性格を示した表
2日目 ペアで登場人物の発話を最低50、時系列順に書き出し、「誰に」「どこで」「なぜ」それを言ったかを分析し、エクセルファイルに書き込む。	
3日目 発話文中の尊敬語、謙讓語、丁寧語を異なる色でハイライトし、全発話文におけるそれぞれの出現頻度を調べる。丁寧語には本来、美化語も含まれるが、今回は文末における使用（です・ます）に限定する。次に、尊敬語と謙讓語のカテゴリーで、使用頻度の高い表現のリストを作る。	②尊敬語、謙讓語、丁寧語の使用頻度表 ③尊敬語と謙讓語の上位リスト
4日目 担当する人物がどの相手に敬語を使っているかを確認する。同じ相手に対して敬語の使用・不使用の両方が見られる場合、それぞれどのような状況か調べる。	
5日目 4日目に行った分析から、発見したことや考えたことなどをまとめる。	④発見・考察をまとめた表
6日目 ペアで、作成したパワーポイントファイルを使って報告会を行う。	

表3 尊敬語・謙譲語・丁寧語の使用頻度

学習者ペア	ジョン, ビビアン	シェリー, ワン	ヨーク, デイン
担当した登場人物	主任・里中	新米派遣社員・森	有能派遣社員・春子
選んだ回	第2話と第3話	全話	第1話と第2話
調べた発話文	60文	125文	50文
尊敬語	0	2	4
謙譲語	0	5	8
丁寧語	33	102	30

表4 尊敬語と謙譲語の上位ランキング

	主任・里中	新米派遣社員・森	有能派遣社員・春子
尊敬語	なし	1位 ~てくださる (1回) 1位 (〇〇さんは) いらっしゃいますか (1回)	1位 お伝えください (2回) 2位 おっしゃった (1回) 2位 なさった (1回)
謙譲語	なし	1位 ~ていただけないでしょうか? (2回) 1位 ~ていただいて (2回) 3位 ~ていただけませんか (1回)	1位 ~いたします (3回) 2位 ~ていただきます (2回) 2位 ~ております (2回) 4位 申し伝えます (1回)

ておらず、ほとんどの発話で丁寧語を用いていたことがわかった。また森の5つの謙譲語は全て「~ていただく」の変化形であったことがわかった。選んだシーンの設定状況次第で登場人物の尊敬語や謙譲語の使用頻度が異なる可能性は大いにある。しかしそれでも学習者にとって意外だったことは、里中が上司と話す際も尊敬語・謙譲語は使わず丁寧語を使い続けていたことであり、課の中で最年少の新米社員である森が、合計7つの尊敬語と謙譲語を除いて、ほとんどの状況で丁寧語を使用していたことであった。

5. 2. 敬語の使用・不使用の状況分析

ジョンとビビアンのペアは、主任・里中の対話相手一人一人について、社内か社外かで発話文をカテゴリ分けし、その中で敬語が使用されているかどうかを分析した。その結果「わかったこと、考えたこと」として二人は次のように報告した。

(里中は) いつでも大前さん(春子)と話す時、敬語(丁寧語)を使います。なぜなら、彼女の仕事の能力を認めますから。彼女は仕事で新設のマーケティング課を任された里中さんをいろいろ助けてあげました。

部下であっても仕事能力が高くて頼りになる相手には、敬意から敬語(丁寧語)を使うことがあると考察している。この発見は学習者にとって新しいものであった。なぜなら、当時授業で使用し

ていた教材の中の、上司の部下に対する発話には、ほとんど丁寧語が使われていなかったからだ。例えば、部下が上司に何かの許可を求めた場合、上司は常にいわゆる普通体で応答していた。そのため学習者らは、上司というものは部下に対して常に普通体で話すのだという認識を持っていたようである。新米派遣・森に対しては、しかし、学習者のこれまでの認識と変わらず、里中が普通体で話していることが確認された。春子と森、二人の部下に対する言葉使いの違いは、彼らの仕事能力やそれを支える経験といったものに対する話者の敬意のレベルによるものだと学習者は気付くことができた。さらに、他課の社員に対する里中の発話に関して次のように分析している。

いつでも、ほかの部門の社員とか、いつも敬語を使いました。同じ会社で働いている社員ですが、同じ部門ではありません。…(略)

たとえ話者が課の主任という立場にあっても、あまり関わりを持たない他課の人間に対しては往々にして敬語を使う判断をすることがあるとわかった。つまり、階級差より会社内部における仕事上の関係の親疎が、敬語を使用するかどうかの重要な判断材料になることがわかったのである。さらに、里中の上司・桐島部長に関しては興味深い報告をしている。

いつでも、部長と話す時、敬語を使います。

なぜなら、里中さんは部長の部下だから、部長に尊敬していると表せますから。

里中が桐島部長に常に敬語を使うのは「尊敬しているから」ではなく、「尊敬していると表せるから」とし、相手に好印象を与える効果を狙った敬語の使用を指摘している。ドラマを視聴する中で、里中が部長を心から尊敬しているわけではないことを察したビビアンとジョンは、敬語が必ずしも敬意という心理的事実を表すものではないことを発見した。

このように、教科書の規範とは異なるより複雑な使用状況を見つけて理由を分析したり、戦略的な敬語の使用に気付いたりすることのできる学習者がいた一方で、敬語の規範に固執し、逸脱現象に気がついても理由を考えようとしなないケースもあった。例えば、主人公・春子を担当したヨークとディンは、春子が敬語を使うのは上司とクライアントに対してのみであると報告した。しかし、二人が作成した分析ファイルを確認すると、森との会話に春子が丁寧語を使っている場面が記録されていた。仕事で失敗をして辞めさせられると落ち込みながらも、森が春子に助けてくれた礼を言う定食屋での場面である。以下はその会話である。

森： (ばやくように) あんな会社で働けてたら、人生変わってたんだろうな。

春子： (昼食を食べる箸を休めずに) それは大きな間違いだね。正社員になってもリストラ。あと、つぶれたら終わりだね。・・・(略)

森： …(略) とにかくさっきは助けてくださってありがとうございました。

春子： (冷めた目で森をまっすぐ見つめ返して) 別に助けてませんから。あれは業務の一環です。

筆者は、上の発話で春子が森に対して丁寧語(下線部)を使っていることを学習者に指摘し、なぜここで急に丁寧語に切り替えたのか考えるように促した。発話の内容が「助けたわけではない、仕事としてやっただけだ」というものであると二人が理解した上で、筆者は、このように言うことによって、春子は森に自分をどういう人間として見せようとしたのだろうかかと質問した。ヨークとディンは、おそらく、会社では仕事以外のことはしないクールな人、会社の中に友達を作らない人だと思われたいのだろう、と述べた。筆者は

それに同意し、友情のような個人的な関係意識を森に持たれることを回避し、あくまで仕事上のフォーマルな関係であることを強調したかったのではないかと、発話の内容で春子はそれを主張しただけでなく、語尾の形式を普通形から丁寧形に変えることによって強調したのではないかと、自分の考えを伝えた。相手に対する心理的な親疎が話者の敬語の使用・不使用に影響することは、教科書ではあまり触れられない。そのため学習者はその現象を注意を払うべきものと認識せず見過ごしたと筆者には思われた。学習者らが分析するに当たり、敬語の使用状況に関するルールを一から自分たちの手で書き直すのだというぐらいの意識を持って、状況をありのまま見つめて検証することを、教師は学習者に求める必要があるだろう。今回の場合は学習者が教師である筆者の考えに同意したが、別の状況では教師と学習者の見解が異なることもあるかもしれない。その場合は、教師も学習者も自分の見解が規範に囚われたものでないかをもう一度問い直し、お互いが納得できるように意見を交わすことが必要だと考える。

5. 3. アンケート結果から

プロジェクトの後、学習者全員に①プロジェクトを通して学んだこと、②活動中に感じた問題点、③プロジェクトを良くするための提案について記述形式で回答してもらった。

5. 3. 1. 「敬語プロジェクト」を通して学んだこと

森の発話を分析したワンは、「～ていただく」「お願いいたします」のような表現がビジネス場面では頻繁に使われることがわかったと答えた。使用頻度の高い言語形式や表現を知ることが、学習の効率化を図ることに役立つと思われる。シェリーは、社内の同じ課の人間には、たとえ目上であっても丁寧語だけで話すことが許されることに気付いたと答えた。身近な上司や先輩なら、謙譲語や尊敬語を使わなくても、丁寧語を使って十分よい人間関係を構築できる可能性は、それまで尊敬語と謙譲語の使用に強迫観念を持っていた学習者にとって、胸をなでおろしたくなる発見ではなかっただろうか。主任・里中の発話を分析したビビアンは、話す相手によって敬語を使うかどうかを決めるのはもちろんだが、話している場所によっても変わることがわかったと述べた。さらに

ジョンは、話し方のトーンにも上司と部下では違いがあることに気付いた。彼によると、上司は部下に対して真面目なトーンで話すことが多いが、部下は上司に対して軟らかく高いトーンで話しているということであった。言語以外の要素が丁寧さや敬意を表す手段となりえることは、学習者にとって重要な発見だっただろう。

5. 3. 2. 活動中に感じた問題と、プロジェクトを良くするための提案

一方、半数の学習者が問題として感じたことは、敬語使用について「何が本当のルールなのかわからなくなった」ということであった。主任・里中の敬語使用について細やかな分析をしたビビアンとジョンは、次のコメントをした。

ドラマでの敬語の使われ方は、教科書の説明と矛盾することがある。それで、何が本当のルールかわからなくなった。プロジェクトの前や後で、先生に正しいルールを説明して欲しかった。(ビビアン)

敬語についてはっきりわかったことがあります。もし敬語についてお勧めのウェブサイトとか本とかあったら、もっとそれを読んで学びたいです。(ジョン)

誰にどのような状況で、どのような敬語を使うか(使わないか)の判断は複雑で人によっても異なることを発見した結果、教科書の単純な記述を批判的に考察することはできたものの、自分の判断の拠りどころを失い戸惑う気持ちが窺われる。他方、同じような問題意識を持ちながら、その原因が自分の担当した人物・春子の言語使用にあるとディンは言う。

どういうときに尊敬語、謙譲語を使うのかわからなくなった。なぜなら、私が担当したのは「大前春子」だったから。「春子」は「東海林」(別の課の正社員)と話す時、尊敬語を使うべきなのに使わなかった。『Boss』というドラマを使ったほうがいいと思います。

春子は、派遣社員に対してしばしば差別発言をする「東海林」に鋭いもの言いやり返すことがよくあった。その結果春子は「東海林」を始め多くの正社員から敵視される。春子のような人物は、ディンにとってリアリティーを欠いており、そのような人物の言葉使いを実社会で働く人のことば

として参考にすることができなかったのだろう。派遣社員として「わきまえた」言動をとらないせいで周囲の人間を敵に回す春子が反面教師のように映り、製作者によるテレビドラマの虚構性が一層強く認識されたようだ。その結果、規範からの逸脱現象はドラマだからこそ可能なもので、現実の会話では起こり得ないと考えようになったのかもしれない。そのような想定が、よりリアリティーのあるストーリーや会話で構成される別のドラマを分析したいという主張につながったのだと考えられる。

「敬語の本当のルールがわからなくなった」問題への対策を行うことを、このプロジェクトをよくするために必要なこととして先の3人は指摘している。ビビアンとジョンは、敬語の「本当の」規範を教師が提示するか、別の教材を使って確認する作業をプロジェクトの前後でやるべきだと主張している。この主張は、敬語についてのより明確で包括的な規範がきちんとあるはずで、そのような規範は教師や教科書のような権威ある者によって示されるか承認されるべきであるという強い信念を示している。一方ディンは、今回とは別のドラマ『Boss』を使うことを提案している。彼女によると、そのドラマでは敬語が比較的「正しく」使われていると感じたそうである。これは、規範どおりの「正しい」言葉使いをしているキャラクターの発話を分析対象にするほうが、それを学んで吸収できるという意味で、自分にとってより学習効率の良い活動であるという主張だろう。

敬語の複雑な使用状況を分析した結果、そこでの発見を自分にとって使用可能な知識・スキルとして整理し保持したいと学習者が考えるのは理解できる。しかし、それは教師がトップダウン的に承認したり再提示したりするのではなく、学習者ら自身が、複数の登場人物による個別の敬語の使用状況を突き合わせながら、ボトムアップ的に共通のルールを確認し合い、合意項目を積み上げていくべきだと考える。例えば、春子たちの課に定年後も嘱託職員として勤める「小笠原」という人物がいる。彼はコンピュータスキルが皆無のため仕事の役には立っていないが、常におおらかで飄々としている。そんな彼が度々発する冗談に対して、森は「何言ってるんですか」と言って受け流し、春子は「無駄口やめて指示に従ってください」とたしなめる。それらの状況を学習者同士で

突き合わせ、状況を概念的に分析する議論を行えば、年配者であっても、気の置けない人柄で、しかも自分と比べても仕事ができるほうではない相手ならば、尊敬語や謙譲語ではなく丁寧語で接する判断が行われるという知識に整理することができるだろう。活動を、自分が担当する人物の分析結果報告だけで終わらせるのではなく、複数のキャラクターの敬語使用状況を突き合わせて、共通するルールのようなものを学習者たちが協働して見つけ出し、合意項目を積み上げていく作業が必要だったと思う。

一方、敬語使用における個人差が製作者の故意による産物であり、テレビドラマという虚構の中でのみ可能になると学習者が認識した場合は、どう対処すべきだろうか。テレビドラマに限らず母語話者による実際の会話であっても、敬語使用には個人差があり複雑なものであることを学習者に理解してもらうために、実際の会話を録画したものを分析させることも必要かもしれない。しかし、そうすればやはり、その複雑な使用状況を説明してくれる明確で包括的な規範を結局は求めてしまうことになるだろう。ここで見極めなければならないのは、学習者が「正しい敬語の使い方」という表現で、身につけたがっているものは、実は、上司や同僚とよい関係を構築し、職場で直面する問題を自分の望む方向に解決することを可能にする、そんな効果を持つ言葉を選択して使用できる能力のことだということである。そうであれば、たとえテレビドラマの発話が構成されたものであったとしても、発話が与える他者への効果に着目して理解を深めることは、言葉を選択的に使用する力を伸ばす上で有効な方法ではないだろうか。例えば、春子が営業部の正社員・東海林に対して「正社員さん」と呼びかけるシーンがある。これは学習者にとって（いや、日本人にとっても）驚くべき規範からの逸脱で、見習うべきではないと捉えられるかもしれない。当の東海林はもちろん怒り心頭するが、春子は東海林を怒らせても自分の雇用状況には影響がないとわかっている。それを知った上でのこの呼びかけは、「ハケンさん」とか「オマエ」などと呼んで派遣社員を見下す東海林に対する怒りの表明であり、結果的に東海林に自身の差別行為を悟らせる効果を生んだ。発せられた言葉の適否は、その言葉の及ぼした効果を検証しなければわからない。いわゆる母語話者の発

話だからといって、すべてが適切で非母語話者が参考にすべきものとは限らないし、逆に規範から逸脱している発話であっても、話者の状況と目的に合致する場合もある。そのような視点を持って、ことばの効果に関する議論を学習者が行い、それへの感受性を磨くことは、日本語使用者としての学習者にとって重要で、今後の活動に取り入れるべきだと考える。

6. 結論と課題

文化を教えるための批判的アプローチの中の一つの視点である、文化を記述的に理解する実践としてこの「敬語プロジェクト」を行った。この実践の目的は、敬語使用の実態を知ることで教科書にある敬語規範を批判的に考察することであった。実践の意義をまとめると次の四つを挙げることができる。一つは、尊敬語や謙譲語の使用頻度を学習者自身の手でデータ化した結果、その頻度が決して高くないことを発見したことだ。それによって会社では尊敬語や謙譲語が頻繁に使われているといった誤解や、それらが完璧に使いこなせなければ一人前と見なされないといった強迫観念を、ある程度取り除くことができた。二つ目は、上述のデータから習得すべき敬語表現の優先順位を学習者が明らかにすることができたことである。三つ目は、実際の敬語使用の有無や丁寧さのレベルは、相手の年齢や社内の地位だけではなく、相手の能力や経験、日々の接触度、心理的な親疎など様々な要素が影響する可能性を、分析を通して発見できたことである。その結果、教科書に記述された敬語に関する規範が、現実の敬語使用を完全に説明するものではないという結論に学習者自身がたどり着いた。四つ目の意義は、映像と音声で構成される豊かな情報を得ることで、敬語以外にも敬意の表現方法があると気づいたことである。

一方、上に述べた意義を学習者全員が活動中に享受するためには改善すべき点も多い。まず活動の目的が、教科書に書かれた敬語使用の規範を再確認することではなく、コミュニケーションの実態を検証することから立ち現れてくる敬語表現の多様性や、使用状況の複雑さを認識することだと、何度も何度も活動中に学生たちに伝えるべきである。そうしなければ教科書という権威が示す規範の呪縛から学習者はなかなか自由になれない。ま

た注意を向けて議論すべきことばがそこにあるにも関わらず、学習者が無根拠に当然視して見過ごしている場合には、教師が指摘してそのことばを使用する根拠について考えるよう促すことも重要である。

さらに大きな問題は、敬語の使用状況の複雑さや個人差を発見した結果、学習者が日本語を使用する際、何を拠り所に、敬語を使うべき相手や状況、敬語のレベルを判断すればいいのか迷うという壁におつかることである。その結果、学習者はより明確で包括的で使用可能な規範を求める傾向を示す。筆者はこの問題に関して、学習者が単に日本語の理解者であるだけでなく使用者になる立場から、自分にとって使用可能なことばの知識とスキルを身につけたいと欲求することを肯定し、支援したいと思う。その方法としては、複数の登場人物の分析をもとに、学習者たちが協働して共通のルールを見つけ出し、合意項目として積み上げて行く作業をするべきだと考える。そして、その協働作業には、久保田が提唱する文化を理解するためのその他の3Dの視点 (diversity, dynamic, discursive) も意識的に取り込むべきだと考える。複数の人物の敬語使用状況を比較することで、学習者は、その使用には個人差があること (diversity) や、担当する人物の敬語使用だけでは気づけなかった、他者との関係の変化に伴う言葉使いの変化 (dynamic) にも気づくかもしれない。それらの現象に学習者が戸惑うとき、教師は、複雑な現象を捨象し単純化して理解しようとするのではなく、複雑なものは複雑なものとして理解するよう励ますことが大切だろう。例えば、学習者が母語で話すときのことを思い出させ、どのような場で、どのような相手に、どのような言葉使いで敬意を表しているのか、クラスで話し合ってみると、お互いの母語における個人差に気づくことができるだろう。そうすれば、外国語のコミュニケーションにおいても同じように個人差が存在することに納得できるはずだ。発話分析後の議論を通して、学習者らが敬語に関する共通のルールを確認できた場合、日本語を使用していく上でそれを参考にはできるが、ことばの個人差や流動性を省みれば、それが決して普遍化することのできない一見識にすぎないものである (discursive) と謙虚に受け止める必要性を話し合うことも必要だろう。このような、ことばの使用実態を分析した

上での議論は、ことばや文化に関するその他の言説を、学習者が批判的に見るための根拠となるはずだ。最後に、ことばが他者に与える効果を検証・分析することは、日本語を主体的に使用する力を育てる上で有益な活動であり、そのためにテレビドラマの発話を分析対象として使用することは有効であると考えている。

文献

- カナダ・オンタリオ州教育省 (編) (1992). 『メディア・リテラシー——マスメディアを読み解く』リベルタ出版. (Ontario Ministry of Education (Ed). (1989). *Media literacy: Resource guide*. Queen's Printer for Ontario.)
- 久保田竜子 (2008). 日本文化を批判的に教える. 佐藤慎司, ドーア根理子 (編)『文化, ことば, 教育——日本語/日本の教育「標準」を越えて』(pp. 151 - 173) 明石書店.
- 熊谷由理 (2007). 日本語教室でのクリティカル・リテラシーの実践へ向けて『WEB版リテラシーズ』4(2), 1-9. <http://literacies.9640.jp/vol04.html>
- 熊谷由理 (2008a). 「日本語を学ぶ」ということ——日本語の教科書を批判的に読む. 佐藤慎司, ドーア根理子 (編)『文化, ことば, 教育——日本語/日本の教育「標準」を越えて』(pp. 130-150) 明石書店.
- 熊谷由理 (2008b). 日本語教室におけることばと文化の標準化過程——教師・学生間の相互行為の分析から. 佐藤慎司, ドーア根理子 (編)『文化, ことば, 教育——日本語/日本の教育「標準」を越えて』(pp. 212-238) 明石書店.
- 坂野永理, 大野裕, 坂根庸子, 品川恭子, 渡嘉敷恭子 (1999). *Genki: An integrated course in elementary Japanese [Textbook II]*. ジャパンタイムズ.
- 山下仁 (2001). 敬語研究のイデオロギー批判. 野呂香代子・山下仁 (編)『正しさへの問い——批判的社会言語学の試み』(pp. 51-84) 三元社.

(2011年10月29日受理)